

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和元年6月21日現在

機関番号：24402

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K03200

研究課題名(和文) 熱帯アジアにおけるアブラヤシ小農の自律性と持続可能性

研究課題名(英文) Autonomy and sustainability of oil palm smallholders in tropical Asia

研究代表者

祖田 亮次 (Soda, Ryoji)

大阪市立大学・大学院文学研究科・准教授

研究者番号：30325138

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：現地調査を中心とする具体的な研究により、マレーシア・サラワク州、タイ南部、フィリピン南部におけるアブラヤシ小農の自律性と持続可能性について比較検討を行った。マレーシアでは、プランテーション開発や各種認証制度の浸透により、小農が土地利用に自覚的になっている。タイ南部では、プランテーションよりも小農によるアブラヤシ生産が重要性を持っており、各種補助制度などを活用しつつ、他の作物との組み合わせを意識した先進的な営農が行われている。フィリピン南部では、アブラヤシが貧困対策の意味合いを持ちながらも、ココヤシ中心の土地利用からの転換が困難である。各地の社会経済状況から、アブラヤシの位置付けは大きく異なる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

アブラヤシはプランテーション優位の作物とされてきたが、各地で小農による栽培も活発化してきた。これは、農業企業と小農との対立や協力関係に変化をもたらす重要な動きとしてとらえられる。アブラヤシ栽培が小農にとって生業ポートフォリオの一部になり得るかどうかを考えることは、東南アジアにおける小農の将来的な自律性・持続性を見極めるうえで重要な意味を持つ。本研究では、各国の土地制度・農業政策といった社会経済的な側面と、気候・地形などの自然的側面の両面から、アブラヤシ依存の可能性とリスクについて、一定の知見を提示できたと考える。

研究成果の概要(英文)：Based on the field research, we compared the autonomy and sustainability of oil palm smallholders in Sarawak Malaysia, southern Thailand and southern Philippines. In Malaysia, smallholders have become conscious about land use through plantation development and penetration of various certification systems. In southern Thailand, oil palm production by smallholders is more important than plantation, and advanced farming practices are being conducted in combination with other crops, utilizing various support systems from the government. In the southern Philippines, although oil palms have the meaning of poverty reduction, it is difficult to shift from coconut-centered land use. The position of oil palms concerning smallholding differs greatly depending on the social and economic situation in each area.

研究分野：地理学

キーワード：アブラヤシ 小農 プランテーション マレーシア タイ フィリピン 持続性 自律性

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

これまで、アブラヤシ栽培に関する研究は、企業的なプランテーションを対象とすることが多かった。アブラヤシ・プランテーションは、1990年代以降にマレーシアとインドネシアを中心に急激に面積を拡大し、大規模な環境改変や土地権をめぐる争い、あるいは労働者の人権問題などに注目が集まった。従来、アブラヤシはプランテーション優位型の典型的作物とされてきたが、2000年代以降、小農による自律的なアブラヤシ栽培が各地で見られるようになった。しかし、小農アブラヤシ栽培に関する研究はこれまでのところごく限られており、世界的に見ても端緒についたばかりの研究領域と言える。

一方、アブラヤシ研究の対象地域に関して言えば、その面積と生産量で圧倒的なシェアをもつインドネシアと西マレーシアに集中しており、パプア・ニューギニアでの研究がそれに続く。わずかに存在する小農に関する研究も、これらの地域以外は皆無に等しい。本プロジェクトで対象とする、マレーシア・サラワク州、タイ南部、フィリピン南西部は、いずれもアブラヤシ産業の後発地域であり、また小農アブラヤシ生産の出現形態が注目に値する地域でもある。つまり、インドネシアやマレーシア半島部で卓越してきた、プランテーション依存型の契約小農や、政府による入植地割り当てと連動した小農とは異なり、ある程度自律性の高い小農栽培が、多様な形で出現している。

本研究では、こうしたアブラヤシ・フロンティアにおける小農の多様なアブラヤシ生産形態に注目し、それらがどのような土地制度・融資体制・税制に基づいているのかを考慮に入れながら、その現状の把握と持続可能性を議論する。それによって、従来のプランテーションに焦点を当てたインドネシアやマレー半島での研究を相対化する。

### 2. 研究の目的

本研究の目的は、主に次の2点である。第1に、熱帯アジアのアブラヤシ栽培最前線地域において、小農によるアブラヤシ栽培がどのように展開しているのかを明らかにすることである。その際、とくに、地域住民の土地利用形態や当該地域の土地制度史との関係から、小農アブラヤシ栽培の拡大過程を考察する。東南アジア各地の土地制度は、森林開発/保全、自然資源の配分調整、および農業地域振興策といった、国家レベルの開発史とも深く関わっており、現在生じている地域住民の生業変化を、よりマクロな時空間的観点からとらえることを可能にする。

第2の目的は、プランテーションを主要な対象とする従来のアブラヤシ研究とは異なり、とくに小規模アブラヤシ農家に焦点を当て、熱帯アジアにおける小農経済の持続可能性について一定のモデルを導き出すことにある。東マレーシア(サラワク州)、タイ南部、フィリピン南西部という3地域におけるアブラヤシ小農の栽培形態をプランテーション開発との関連性を考慮しつつ比較することで、各地域に共通の課題を明らかにする一方で、地域性や歴史性および現地の社会構造等に則した、それぞれの発展可能性を模索することが可能になる。

### 3. 研究の方法

本研究を行う上で、次の2つの問いを設定する。第1の問いは、他の作物と比較してより大きな土地と初期投資を必要とし、約30年という果房生産スパンを持つアブラヤシ栽培は、現地農民の不可逆的な生業変化をもたらしうるのか、あるいは作付品目の選定と生業の選択に関して農民自身の自律性とフレキシビリティは確保されるのかという点である。このことは、サラワクにおいては、移動式焼畑や狩猟採集といった従来の生業および土地利用との不連続性を考慮に入れて検討されるべき問題である。一方、タイやフィリピンにおいては、小農創出・育成の歴史といった土地政策・農業政策過程との関連を重視しつつ考察していくことになる。

第2の問いは、小農によるアブラヤシ栽培の拡大は、プランテーションによる大規模な環境改変・破壊に加担することになるのか、あるいは企業による広域の土地収奪を抑制し、比較的環境負荷の低いモザイク景観を形成・維持する要因となりうるのかという点である。これは、土地利用をめぐって、プランテーションと小農との間の競合関係あるいは相互依存関係について考察することにもつながる。

具体的には、次の点に着目する。モビリティの高い生業が行われてきたサラワクでは、小農の土地権は制度的にも意識面でも薄弱で、そのことがプランテーションの劇的な拡大を許したが、近年は先住民が対抗的にアブラヤシを植え、土地占有の既成事実化をはかる動きもあり、小農によるプランテーション拡大への牽制がどのような効果をもつのか検証に値する。

一方、タイにおいては小農によるアブラヤシ栽培が卓越しているが、そこには政府による小農の創出・育成というこれまでの政策史的背景があり、小農の土地権意識がプランテーション拡大の阻害要因になっていることも予想される。

フィリピンでも大土地所有の解体と自作農育成という戦後の土地政策過程があり、特に南西部においては先住民の貧困対策として小農アブラヤシ栽培が推奨されてきたが、その一方で、外国資本による企業的農園開発も同時進行しており、小農-プランテーション関係がどう調整されているのか(いないのか)という観点からの調査が求められる。

これらの異なる背景を持つ地域において、小農の生業戦略という観点から詳細な現地調査を行うことで、上記の問いへの回答を導き出せると考えられる。

#### 4. 研究成果

マレーシア・サラワク州においては、ここ数年で小農の状況が大きく変化しつつある。アブラヤシ栽培後発地域で、なおかつ小農支援がほぼなかった地域において、逆説的ではあるが、小農は一定程度の自律性・独立を維持してきたことが予想された。これは、プランテーション優位の政策の中で、小農が無視されていた一方、プランテーションとの関係で小農が従属性を持ったり、搾取されたりするような制度自体が存在しなかったことと関係すると考えられる。この予想は、現地調査によっても、大きく間違っていたわけではないことが確認された。しかし、マレーシア全土で MSPO と呼ばれる認証制度が普及し、認証取得が小農にも義務付けられたことで、状況は大きく変化しつつある。こうした認証制度の普及策は、明らかに半島部をベースとしたものであるが、それが辺境の地とされるサラワクにも導入されたことで、内陸で独立的に、あるいはインフォーマルにアブラヤシ生産を行ってきた小農たちにも変化が生じてきた。その一つの表れとしては、DOPPA と称する内陸先住民のアブラヤシ生産者団体の設立と活動の活発化である。DOPPA はサラワクにおいて実質的に初めての農業生産者団体と言える。DOPPA の当初目的は認証取得ではなく、先住民の経済的地位の向上であったが、実質的には認証取得のための小農支援(技術指導も含む)が主要な活動内容となりつつある。ただし、DOPPA の幹部は都市居住者が中心で、有職者である都市エリート層の観点からの栽培戦略の推進は、都市 - 農村間の格差の拡大にもつながりかねないリスクをはらむ。また、認証制度は様々な基準のクリアが必要になり、これまで従来を生業(焼畑や狩猟採集など)との組み合わせでアブラヤシ栽培を工夫してきた先住民にとっては、アブラヤシに特化した農業活動を志向せざるを得ない状況に追い込まれ、生業ポートフォリオのフレキシビリティを失う可能性も高い。小農の「自律性」という点では、認証制度にのっとって経営の規格化を行うことが逆効果をもたらす可能性も指摘できる。

タイ南部においては、アブラヤシ小農の自律性はかなり高いレベルで維持されていると判断できた。これは、タイにおける農業政策の歴史がある程度反映されているためであろうと推察できる。20世紀初頭までに何度か試みられた各種プランテーション開発が失敗に終わり、タイでは早い段階から、農業生産の主アクターとして小農に焦点を当てることになった。それが、タイの農村において小農たちに土地所有を明確化する方向に動いた。20世紀末になってアブラヤシ・プランテーションが注目されることになったものの、タイの農村では土地権の問題などから、企業が広大な土地を開発することが容易ではなく、マレーシアやインドネシアと比較してプランテーション規模は小さなものが多い。これは、搾油工場の稼働率にも影響する。企業が搾油工場を操業する場合、自社農園だけで原料調達をすることは難しく、小農からいかに果房を集めるかが重要になってくる。そのため、小農の側も企業との交渉力を持ち得ることになる。それに加えて、従来からの政策としても、農業局による小農支援策が各種用意されており、また、生産者による組合活動も活発で、企業との関係性を常に意識していることが確認された。農業形態についても、サラワクのようにアブラヤシに特化する農民は少なく、むしろ、内水面漁業も含め、多様な農業活動の中の一つとして、アブラヤシを位置付けている点が特徴的であると言える。一定程度の規模を持つ小農は、ミャンマー人労働者を使うことも多いが、そうした外国人労働力の調達を担うブローカーも存在しており、小農にとって様々な面でインフラが充実していることが分かった。

フィリピン南部では、都市部での治安の改善はみられるものの、都市から排除された暴力的集団が周辺に拡散し、農村部では逆に治安が悪化しつつある。そのため、アブラヤシ小農に関する調査は困難な状況となっていたが、いくつかの知見を得ることはできた。フィリピンにおいても、プランテーションと小農が併存する形となっている。アブラヤシの普及当初は、小農の貧困対策として期待がかけられていたものの、予想していたよりも成長は伸び悩んでいることが分かった。フィリピンではアブラヤシを専門に扱う政府機関が存在せず(ココヤシ局がアブラヤシも担当している)公的な小農支援は十分とは言えない。治安が悪化している中で、一部の小農は「盗まれにくい作物」として、アブラヤシを重視しているが、多くの貧困小農にとっては初期投資や土地確保の困難があり、ココヤシ栽培中心の生業形態からの転換が難しく、現在までのところ小農の重要な生業となりえていない状況が明らかになってきた。政策的にも、輸出品としてのココヤシとどのようにバランスをとってアブラヤシを補助していくべきかの方針が明瞭になっておらず、貧困解消のツールとしての意義は明確になっていない。こうした現状を見ると、当初期待されていたような小農の成長は、現実的には厳しいと考えられる。

以上より、アブラヤシは一定の初期投資と土地面積が必要な作物であり、それらの条件を満たしていないと、小農の生業として成立させることは難しいことが分かる。また、政策的な小農支援のあり方も大きく関わる。サラワクの場合は、企業との土地紛争を抱えながらも、焼畑や狩猟を行ってきた先住民たちは十分な土地を保有しており、都市での賃金労働などで初期投資費用が得られれば、少しずつ植栽していくことが可能である。ただし、都市や世界市場との関係性の変化過程で、アブラヤシ栽培がフォーマル化する中で、小農の自律性をどう確保できるかは微妙である。タイでは伝統的に小農支援が充実しており、先見性を持った小農たち(篤農家とも呼びうる先導的農民)は、農業局の支援を受けつつ、企業や工場とも対等な交渉を行い、レイバーギャングとも呼びうるインフォーマル業者を利用しつつ労働者調達・果房運搬にも優位性を維持しており、自律性の確保・維持という点ではアブラヤシ栽培が持つ意味は大き

い。フィリピン南部では、初期投資を行う上での障壁が高く、政策的にも小農支援が手薄で、輸出品としての位置付けも不明確なため、小農の自律性という点においてアブラヤシ栽培は重要な意味を持ち得ていない。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 5 件)

- 祖田亮次 2018. 熱帯アジアにおける人 自然関係論 ボルネオ北西部を事例として 歴史科学 232: 59-71 .
- Takeuchi Y., Soda R., Diway B., Kuda Ta, Nakagawa M., Nagamasu H. and Nakashizuka, T. 2017. Biodiversity conservation values of fragmented communally reserved forests, managed by indigenous people, in a human-modified landscape in Borneo. *PLoS ONE* 12(11). DOI: <https://doi.org/10.1371/journal.pone.0187273>
- 祖田亮次 2017. マレーシアの中のサラワク、マレーシア研究の中のサラワク研究 . マレーシア研究 6: 3-20.
- Soda, R. 2017. Culture and acceptance of disasters: supernatural factors as an explanation of riverbank erosion. *Ngingit* 9: 18-24.
- Sakai, S., Choy, Y. K., Kishimoto-Yamada, K., Takano, K. T., Ichikawa, M., Samejima, H., Kato, Y., Soda, R., Ushio, M., Saizen, I., Nakashizuka, T. and Itioka, T. 2016. Social and ecological factors associated with the use of non-timber forest products by people in rural Borneo. *Biological Conservation* 204 (Part B): 340-349. DOI: 10.1016/j.biocon.2016.10.022

〔学会発表〕(計 9 件)

- 祖田亮次・生方史数・葉山アツコ 2019. アブラヤシ認証が作り出すサラワク「小農」世界 生産者団体の活動に着目して . 第 29 回熱帯生態学会年次大会 . 北海道大学 , 札幌市 . (2019 年 6 月 15 日)
- Soda, R. 2018. Trans-disciplinary approach to human-nature interactions in Sarawak, Malaysia. UNIMAS-OCU Seminar. Osaka City University, Osaka, Japan. (November 14, 2018)
- 酒井章子・Choy Yee Keong・岸本圭子・高野(竹中)宏平・市川昌広・西前出・鮫島弘光・加藤裕美・祖田亮次・潮雅之・中静透・市岡孝朗 2018. マレーシア・サラワク州の村落周辺の森林被覆変化 . 第 28 回熱帯生態学会年次大会 . 静岡大学 , 静岡市 . (2018 年 6 月 9 日)
- 祖田亮次 2018. マレーシア・サラワク州における人 - 自然関係の変化—災害、プランテーション、保全林 . コタキナバル日本人会第 5 回講演会 . コタキナバル日本人会館 (日本人学校) , コタキナバル , マレーシア . (2018 年 1 月 27 日)
- 祖田亮次 2017. ボルネオにおける人間 - 環境関係の変化—マレーシア・サラワク州を事例に . 総合地球環境学研究所 平成 29 年度インキュベーション研究「環インド洋熱帯地域における複数発展経路と自然環境 - 比較と連関」第 2 回研究会 . 総合地球環境学研究所 , 京都市 . (2017 年 8 月 26 日)
- 祖田亮次 2017. ボルネオにおける環境変化と社会的インパクト . 大阪歴史科学協議会 2017 年 4 月例会 . クレオ大阪中央 , 大阪市 . (2017 年 4 月 22 日)
- Sakai, S., Choy, Y. K., Kishimoto-Yamada, K., Takano, K., Ichikawa, M., Samejima, H., Kato, Y., Soda, R., Saizen, I., Nakashizuka, T. and Itioka, T. 2017. Urbanization, population change and forest cover in rural Borneo. The 64th Annual Meeting of Ecological Society of Japan. Waseda University, Shinjuku, Tokyo, Japan. (March 14-18, 2017)
- 祖田亮次 2016. 環境変化下における自然生態研究—異分野接合の可能性と地域研究 . 東南アジア学会第 96 回研究大会 (50 周年記念シンポジウム : 「ものがたり」, そして「ともがたり」へ—変わりゆく東南アジアと東南アジア研究) . 慶應義塾大学 . 東京都港区 . (2016 年 12 月 3 日)
- 祖田亮次 2016. マレーシア (研究) の中のサラワク (研究) . マレーシア学会 2015 年度 (第 25 回) 研究大会 (シンポジウム『サラワクから見るマレーシア』) . 京都大学 , 京都市 . (2016 年 11 月 27 日)

〔図書〕(計 1 件)

- Ishikawa, N. and Soda, R. eds. (in printing) *Anthropogenic Tropical Forests: Human-Nature Interfaces on the Plantation Frontier*. Springer.

〔産業財産権〕

出願状況 (計 0 件)

名称 :

発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年：  
国内外の別：

取得状況（計 0 件）

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等

## 6 . 研究組織

### (1)研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号（8桁）：

### (2)研究協力者

研究協力者氏名：生方史数

ローマ字氏名：UBUKATA Fumikazu

研究協力者氏名：葉山アツコ

ローマ字氏名：HAYAMA Atsuko

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。